

サハリン韓人の言語・文化教育の現状：サハリン韓国文化院の授業を中心に

渡邊 香織

キーワード：サハリン韓人、サハリン、言語教育、韓国語、韓国語教育

1. はじめに

本稿は、サハリン韓人¹の言語・文化教育の現状を報告するものである。サハリン韓人は日本統治時代の朝鮮半島からサハリン（当時は「樺太²」）に渡った人々とその子孫である。日本と歴史的に深い関係がありながら、日本ではサハリン韓人についてほとんど知られていない。本稿の目的は、サハリン韓人の言語・文化教育の実態を明らかにすることにより、現代を生きるサハリン韓人の一端を日本社会に伝えることである。

筆者は2020年1月14日から3月17日までサハリンに滞在し、州都であるユジノサハリンスク市にあるサハリン韓国韓国教育院（以下「教育院」）で授業観察と関係者からの聞き取り調査を行った。インタビューに使用した言語は韓国語³である。本稿では、まずこれまでのサハリン韓人の民族教育について概観する。その後、教育院での授業観察と聞き取り調査の結果を報告する。

2. サハリン韓人の民族教育

朝鮮半島からサハリンへの最初の移住者は19世紀の70～80年代とされる。大部分は飢饉や政治的理由で朝鮮半島を脱出し、沿海州を経てサハリンに流れ着いた農民や漁師、囚人であった。日露戦争後にサハリン島の南半分が日本領となつてからは、南部への移住が集中した（クージン 1998：171）。

朝鮮半島出身者の樺太への大規模移住は1937年から始まる。朝鮮半島から、あるいはすでに日本本土に来ていた朝鮮半島出身者が、樺太開発の労働力として樺太に渡った。日本の終戦時点で、南樺太の朝鮮人の人口は1万5千人、または約4万人だったと言われている⁴。

日本の敗戦後、日本国籍を喪失した朝鮮半島出身者たちはそのままサハリン残留を余儀なくされた。その後、樺太時代に日本の学校として使用していた建物が朝鮮学校に変わり、朝鮮語による教育が行われるようになった。しかし、1964年にソ連によって民族教育が禁

¹ 彼らを指す名称は「在樺朝鮮人」、「サハリン残留朝鮮人」など様々だが、本稿では「サハリン韓人」に統一する。旧ソ連地域に暮らす朝鮮系住民は一般的に「高麗人」と呼ばれるが、サハリン韓人は高麗人とは異なる集団である。

² 本稿では日本領時代のサハリン島は「樺太」、日本領でなくなった以降の話をする場合は「サハリン」とする。なお、サハリン韓人が主に移住したのは日本領だった南樺太である。

³ 本稿では、サハリン韓人の使用する言語を「韓国語」とするが、1963年までに建てられたサハリン韓人の民族学校は「朝鮮学校」、そこで教えていた言語は「朝鮮語」とする。

⁴ 人口については諸説ある。（クージン 1998：225）

止され、それ以降朝鮮語による教育は途絶えてしまった。その後 1985 年のペレストロイカ以降、民族教育の禁止が解かれ、1988 年のソウルオリンピックが契機となってサハリン韓人の韓国語⁵教育は復活した。ただし科目として「韓国語」を教えることが始まっただけであり、民族学校が復活したわけではない。最初に「韓国語」の授業が始まったのはユジノサハリンスクの第 9 学校（ロシアの義務教育を行う学校で 11 年制）である。韓国語教育が始まると、教材・教師の不足が問題となり、韓国語教育の専門家養成のため同年サハリン師範大学に韓国語科が開設された。サハリン師範大学は現在サハリン国立総合大学となり、韓国語学科はサハリンにおける韓国語教育の最高学府として機能している。

現在、サハリンには日本や中国のようにコリアンのための民族学校は存在しない。過去に民族教育が禁止され、その間に生活言語としての韓国語がほぼ失われてしまったためである。また、民族学校は経済的に設立が困難であった。寄付をしてくれるような組織・人物はおらず、韓国とソ連の国交がなかったために本国に支援を頼むこともできなかった⁶。韓国とソ連が国交を結んでまもなく教育院が設立され、韓国を学べる環境がある程度整ったことも、サハリンには民族学校が誕生しなかった理由のひとつである。ペレストロイカ以降に誕生した韓国語を教えるすべての機関が、サハリン韓人だけでなく、韓国語を学ぼうとする人なら誰でも受け入れている。「サハリンで韓国語（朝鮮語）を教えること」は、「サハリン韓人のための民族教育」からペレストロイカ以降「すべてのサハリン市民のための韓国語・韓国文化教育」へ変化したのである。

韓国語教育復活直後は、1 世である祖父母や親の意向で韓国語を学ぶサハリン韓人が多かったが、現在韓国語を学ぶサハリン韓人の学習動機は多様化している。韓流ブームの影響で韓国語を学ぶロシア人も急増している。また、これまでサハリンで韓国語を学ぼうとする場合、1 世から直接教わるか、サハリン内で韓国語の授業が開講されている学校へ進学するしか方法がなかったが、韓国とソ連が国交を結び、韓国への渡航が可能になってからは、サハリンでの韓国語教育を経ずに直接韓国に留学する者も現れるようになった。さらに、今回のフィールドワークでは、韓国語ではなく日本語や英語、ニヴフ語など韓国語以外の言語を積極的に学ぶサハリン韓人の若者の姿も確認できた。

文化教育の面では、教育院の韓国料理教室、テコンドーや韓国伝統音楽を教える団体、韓国の伝統行事や K・POP のど自慢大会等の様々なイベントが、サハリン韓人だけでなくサハリン全体に韓国文化を広める役割を果たしている。また、4-⑥で後述するように、サハリンでは韓国料理がサハリンの食文化のひとつと言えるほど浸透している。ユジノサハリンスク市内にはたくさんの韓国料理店があり、スーパーでは韓国総菜、韓国の調味料、菓子、カップ麺等が簡単に手に入る。韓国料理はサハリン韓人だけでなくサハリンで暮らすロシア人にも好まれている。

⁵ ペレストロイカ以降は「朝鮮語」ではなく「韓国語」とする。

⁶ 北朝鮮とは国交があったが、北朝鮮は深刻な経済的困難に陥っていたため支援を受けられる状況ではなかった。また、サハリン韓人はほとんどが朝鮮半島南部の出身者であることから、北朝鮮への心理的距離があったことも理由である。（サハリン国立総合大学韓国語学科長へのインタビューより）

このように、一見すると言語と文化の教育がきちんとして行われており、一般に広く普及しているように見える。しかし、これらはすべて「生涯教育」や「社会教育」、単なる「イベント」の域を出ない。特に文化教室と文化イベントは、「料理」や「音楽」といった誰にでも「分かりやすい」コンテンツのみが強調されているように思える。朝倉(2015)や안상경・이병조(2013)で「サハリンの韓国料理はサハリン風に変化したものがある」「サハリンで教えられている伝統音楽・舞踏は北朝鮮色が強い」との指摘もあり、それらを「韓国文化」として広めるのは危険である。また、分かりやすいコンテンツは着々と普及する一方で、伝統的な生活習慣や風習、迷信、民俗信仰等は急速に失われつつあるか、すでに失われてしまっている⁷(안상경・이병조 2013)。

3. サハリン韓国教育院とは

韓国教育院は韓国の在外国民に関する法律第 29 条によって設立された機関で、世界各地にある。主に韓国語の普及、ハングル学校のエデュケーション支援、韓国人留学生の相談、外国人留学生の(韓国への)誘致活動支援、海外のエデュケーション情報の収集および報告を行っている。公的機関ではあるが、公教育を行う機関ではない。

サハリン韓国教育院(以下「教育院」)は 1993 年に設立され、ユジノサハリンスク市内にある 2 階建ての韓国文化センター(以下「センター」写真 1)内にある。このセンターの建物は日本政府の支援金によって建てられた。持ち主はサハリン韓人協会ということになっており、センターの 2 階にサハリン韓人協会をはじめとしたサハリン韓人関係機関の事務局、サハリン韓人資料室がある。教育院はサハリン韓人協会にテナント料を支払う形で入居している。



写真 1 韓国文化センター(本文中の写真はすべて筆者撮影)

現在、教育院では初級から中級までの韓国語教室、文化教室、韓国料理教室が行われている。そのほかに、センターではなく街の芸術学校で、韓国伝統音楽・舞踏のエデュケーションも行っている。

韓国語教室の講師はサハリン国立総合大学(以下「サハリン大」)韓国語学科の教授か、韓国語学科の卒業生である。文化教室と料理教室はサハリン在住の韓国人が講師を務めている。韓国語教室の受講者はこれまでサハリン韓人がほとんどだったが、現在はロシア人受講者が急増してい

⁷ ただし、先行研究(たとえば朝倉(2015)、池田(2005)、안상경・이병조(2013))でも多く指摘されているように、食文化だけは維持されている。料理自体はサハリン風にアレンジされていたとしても、サハリン韓人はすべての世代で毎日家では韓国料理を食べている。今回サハリン滞在中に出会ったすべてのサハリン韓人たちが「毎日必ず韓国料理を食べる」と話していた。

る。文化教室はサハリン韓人のおばあさんたち(主に2世)を対象としたクラスで、韓国の歌謡曲をみんなで歌うクラスである。料理教室はほとんどの受講者がロシア人であり、講師は韓国語で説明をするが、通訳(教育院スタッフ)が逐次ロシア語に訳す。教える料理はサハリン式の韓国料理ではなく、本国の韓国料理である。

4. 授業観察と聞き取り調査

教育院では2020年現在、韓国語のクラスとして「入門」、「初級1・2」、「中級1・2」、「お母さんと学ぶハングル」を、韓国文化のクラスとして「韓国文化主婦教室」、「韓国料理教室」を運営している。教育院のホームページ⁸によると、過去には初級クラスが1・2・3に分けられており、他に「韓国語高級」、「トンソ大学⁹留学準備クラス」、「韓国語基礎会話」等のクラスもあったが、現在はそれらのクラスは実施されていない。今回は韓国文化センター内で行われている4つの韓国語の授業と、文化教室、料理教室の授業を観察した。

センター内で行われる授業のうち、料理教室以外は週に2回(月・水もしくは火・木)行われる。授業時間は入門・初級・お母さんと学ぶハングルが50分、中級は1時間50分、料理教室は週に1回2時間である。最も早い授業は15時から始まり、最も遅く始まる授業は19時からである。国籍や年齢の制限はなく、小学生から高齢者まで、多様な年齢層の人々が学んでいる。

①入門

2020年1学期(2月開始)の場合、入門クラスは5クラス開講されており、最も多い。入門クラスではハングルから学ぶことになっているが、教材や進め方は講師に一任されている。他のレベルのクラスでも教材や授業の進め方は講師に一任されている。

参観した入門クラスは火・木クラスで、受講生は8人で全員女性だった。サハリン韓人とみられる人が2名ほどいた。このクラスでは講師は월광학교¹⁰の教科書を見ながら授業を行っていたが、受講生は誰も教科書を持っていなかった。講師がホワイトボードに韓国語とロシア語で単語を書き、受講生一人ひとりに発音させていた。授業はすべてロシア語で行われていた。

このクラスの講師は20代の男性で、父親がロシア人、母親がサハリン韓人のハーフである。サハリン大の韓国語学科出身者で、教育院の他に、第9学校でも韓国語を教えている。

この講師は韓国への留学経験がある「新世代」である。先行研究では、サハリンにおける韓国語教育の問題点として、講師に韓国での生活経験がなく、韓国語を教えるうえで困難が生じていると言われていた(임엘비라 2006)。韓国とロシア(ソ連)の間には1991年まで国交がなく、サハリン大が韓国の大学と留学提携を結んだのも2000年代以降であり、それ

⁸ ホームページの「한국어교실(韓国語教室)」から2011年度から現在までの時間割を見ることができる。

⁹ 韓国にある大学でサハリン大の留学提携校である。

¹⁰ モスクワにある韓国系の学校が作成した教科書である。サハリンではこの教科書が好まれている(조현용・이상혁 2012)。

までサハリンから韓国への留学は実質不可能だったためである。現在サハリン大は韓国のトソ大、釜山外大、東国大と留学提携を結んでおり、毎年交換留学生を送り出している。その他に、サハリン韓人の学生の場合は韓国の在外同胞財団の奨学金制度を利用して韓国に長・短期で留学することも可能である。韓国留学が叶わなかった時代にサハリン大で韓国語を学んだ人々は、現在の状況を「羨ましい」と異口同音に話す。今回の調査では、このクラスの講師のように留学経験のある若い講師が育っていることが分かった。

②初級

入門クラスを参観した日は、入門クラスが終わった後、そのまま同じ講師による初級クラスが行われた。初級クラスは初級1が4クラス、初級2が1クラス実施されている。この時参観した初級クラスは初級1で、受講生は12人、サハリン韓人とみられる男性が1人いる以外は、全員女性であった。そのうちサハリン韓人とみられる女性が6人いた。受講生はほとんどが10代後半から20代前半と思しき若者である。

このクラスは韓国語で簡単な会話ができるレベルである。授業の最初に講師が受講生を当て韓国語で日付を尋ね、当てられた受講生は韓国語で答えていた。講師は受講生が答えた日付をホワイトボードの隅に数字とハングルで書く。後日、中級クラスでも全く同じ光景が見られた。教育院の講師陣はサハリン大出身であることから、このやり方はサハリン大で一般的なのかもしれない。

このクラスも指定された教材はなく、講師が板書する他に、プリントが配られた。プリントはロシア語で書かれた韓国語の教科書や、韓国の大学附属の語学学校で使用されている教科書、韓国教育院で作成している教科書等をコピーしたものを適宜講師が準備している。受講生の中には韓国教育院の教科書を持っている人もいた。以前から教育院で韓国語を勉強しており、その際に無料でもらったものだという。

この日の授業は天気に関する語彙がテーマで、講師が韓国語とロシア語で天気に関する語彙を板書した後、プリントを配って練習問題を解かせていた。数分時間をとって問題を解かせた後、一人一人当てて答えさせる。このクラスはまだハムニダ体¹¹しか使えないようだった。

③中級

中級は中級1と中級2の2クラス開講されている。週2回のうち、1回はロシア人講師が文法の授業を行い、もう1回はサハリン韓人講師によって新しく習った文法を使った会話の授業が行われる。

¹¹ 日本語の「です/ます体」にあたる敬意体が韓国語では「ハムニダ体」と「ヘヨ体」の2種類ある。一般的に、ほとんどの韓国語の教科書は、格式体であるハムニダ体をまず教え、その後ヘヨ体を教える形式をとっている。しかし実際の会話場面ではハムニダ体のみで会話が構成されることはほぼなく、ヘヨ体が広く一般的に使用される（金珍娥 2019）。そのためハムニダ体を教えるべきか、教えるとしたらどのレベルで教えるべきか、教科書の例文にハムニダ体のみで構成される会話を載せるべきか等、韓国語教育者の間で議論が続いている。

参観した授業は受講生が 11 人おり、全員若い女性であった。サハリン韓人とみられる受講生が 7 人おり、そのうち 2 人は高校生のようだった。初級クラス同様にまず講師が受講生を一人当てて今日の日付を韓国語で質問し、答えをホワイトボードに書いた。その後も受講生全員を一人ずつ指名し、曜日、今日何をしたか、何を食べたか等を韓国語で答えさせる。サハリン韓人の受講生は全員ロシア式の名前だったが、発言内容は「今日は昼にキムチチゲを作った」「キムチを食べた」等、生活面には韓国文化が色濃く残っている様子がうかがえた。

この授業は文法の説明はロシア語で行われるが、韓国語が使われる割合も高い。受講生全員が韓国教育院作成の教科書を持ってきており、授業は教科書と講師の配るプリントがメイン教材である。この日は正しい連結語尾を選んで文章を繋げる練習問題をした後、新しい文法を学んだ。練習問題は全員に当て文章を発音させた後にロシア語訳もさせる。新しい文法は講師がロシア語で説明した後、各自に文を作らせて発表させる。このクラスはヘヨ体を習っているようで講師も受講生もヘヨ体で話していたが、ハムニダ体も高い割合で混在していた。

このクラスのロシア人講師はサハリン大韓国語学科 OG でもあり、現韓国語学科教授でもある。幼い頃からサハリン韓人が身近な存在だったため韓国と韓国語に興味を持つようになり、サハリン大の韓国語学科に入学したという。在学中は留学制度がなかったために留学できなかったが、韓国語を教える立場になってから、韓国語教師の研修で韓国に数か月滞在したことがある。これまで教え子は祖父母や親に言われて韓国語を習いに来るサハリン韓人が大半だったが、ここ数年は韓流ブームの影響で韓国のポップカルチャーに興味のあるロシア人受講生が激増したという。大学も同様にロシア人の学生が増え、現在の韓国語学科にはサハリン韓人の学生はほとんどいない。しかし、講師はこの傾向は悪いことではなく「面白い現象だ」と話していた。

④お母さんと学ぶハングル

このクラスは親子が一緒に通うことを想定してはいるものの、実際は誰でも参加可能である。参観した授業は大人と子ども合わせて 7 人が在籍しているクラスだったが、参観した日は猛吹雪の影響で来られない受講者が多く、サハリン韓人の母子 1 組とキルギス人の小学生 1 人だけが出席していた。講師によると CIS 国家からの出稼ぎ労働者が増えてから、その労働者の子どもたちが韓国語を学びに来るケースが見られるようになったという。彼らは高麗人(旧ソ連地域に暮らす朝鮮系住民)というわけではなく、様々な動機から韓国語を学んでいる。



写真 2 「お母さんと学ぶハングル」授業風景

このクラスは受講生全員が韓国教育院作成の教科書を持っており、教科書を中心に授業が進められる。この日は職業の言い方、否定文の作り方、助詞을/를の使い方がテーマであった。入門・初級クラス同様に、ハムニダ体のみが使用されていた。この授業では、講師が板書した単語のスペルや助詞が間違っていたり、「너는 직업이 무엇입니까? (おまえの職業は何ですか?)」のような待遇法の誤った表現を講師が使っている等、教育上問題点が見られた。子どもが対象のクラスでありながら、少なくともこの日はイラストの使用やゲーム等の活動はなく、文法の説明の際に講師が「動詞」「助詞」等の用語を使用しており、子どもには難しいのではないかと感じられた。特にキルギス人の小学生は講師の質問にほとんど答えられず、沈黙してしまうことが多かった。

⑤韓国文化主婦クラス

このクラスはロシア語と韓国語がバイリンガルのサハリン韓人 2 世を対象に作られたクラスである。9 人の受講生が在籍しているが、参観した日は猛吹雪のため 4 人しか出席していなかった。受講生は全員女性で韓国語がとても流暢だが、1 人だけ少し韓国語がたどたどしい女性もいた。彼女が聞き取れない時や知らない単語が出て来た時は、講師と他の受講生がロシア語で手助けしていた。

このクラスはサハリン韓人同士の交流の場としての意味合いが強く、授業時間は教室に備え付けてあるカラオケ機材を使って、韓国の歌謡曲を歌う。参観した日は歌う前に少しだけ韓国の諺を勉強していた。講師はサハリンにある韓国系教会の牧師夫人で、韓国出身者である。講師の話す韓国語は方言も強くかなりの早口だが、ほとんどの受講生が問題なく聞き取って会話していたことから、このクラスの受講生の韓国語レベルの高さがうかがえる。講師はサハリン在住歴が 20 年以上でロシア語に堪能なため、時折ロシア語単語も混ぜながら話していた。

⑥韓国料理教室

料理教室だけは週に 1 回、2 時間の開講ある。教育院は料理ができるよう水道が備え付けられた教室が一部屋だけあり、調理器具や食器も備えられている。センター内でイベントがある際はその教室が厨房として使われることもある。料理教室はキャンセル待ちの出る人気講座であり、特に最近ロシア人主婦の受講生が増えている。元々サハリン市民は韓国料理に慣れ親しんでおり、街中にも韓国料理店がたくさん立ち並んでいてスーパーでは韓国

風の総菜が簡単に手に入る。これまでサハリンのロシア人にとって韓国料理は「店で食べるもの」もしくは「スーパーで買って食べるもの」であったが、最近は「家で作りたい」と韓国料理の作り方を学ぼうとするロシア人が増えている。参観した日は6人の受講生がおり、1人だけ少し韓国語を話すサハリン韓人女性がいた他は、全員ロシア人女性であった。受講生は2人1組で料理をする。

講師はユジノサハリンスク市内のホテルで調理師をしている韓国出身の女性であり、その夫(韓国出身)がアシスタントを務める。この講師はウリマル放送¹²番組内の料理コーナーにも時折出演している。講師は韓国語で説明をし、その隣で教育院スタッフがすぐにロシア語に訳す。材料と道具類、韓国語とロシア語で書かれた写真付きレシピは予め各テーブルに準備されている(写真3)。



写真3 料理教室(後ろに水道が備え付けられている)



写真4 サハリンで一般的に売られている「白いチャブチェ」



写真5 料理教室で作ったチャブチェ(チャブチェは本来このように黒い)

参観した日は「チャブチェ(春雨炒め)」を作る日だった。ユジノサハリンスク市内のスーパーの総菜コーナーでもよく見かける料理である。しかし講師はそれを「白いチャブチェ(写真2)」と呼び、韓国で食べられているものとは別物だと話していた¹³。サハリンにはサハリン風にアレンジされた「サハリン風韓国料理」もたくさんあるが、この授業で教えるのは本国式の韓国料理である。講師も「本国式」を強調し、サハリンの韓国料理とどこかどのように異なるのかを解説していた。市内のたいていのスーパーには韓国から輸入された調味料や食材を置いているため、材料を準備するのに困ることはないが、講師は材料が購入できる店や代用品についても細かく説明していた。講師の説明を聞きながら各ペアは料理を

¹² サハリン韓人のメディアである。韓国語とロシア語によるテレビ放送を行っている。1956年にラジオ局として始まったが、その後廃止され、2004年からはテレビ放送を行っている。どちらもサハリンのニュースのほか、サハリン韓人社会のニュースやイベントなどについて報道している。

¹³ チャブチェは醤油で味付けをするため春雨が醤油の色で黒くなる(写真3)。しかし講師によると、ロシア人は食べ物の色として黒を好まないため、サハリンではチャブチェを作る際に醤油を使わず塩で味付けをする。また、チャブチェは春雨を茹でた後に炒めて作る料理だが、サハリンでは春雨を炒めず茹でた後にすぐ他の野菜や調味料と混ぜ合わせるのだという。そのためサハリンのチャブチェは本国とは異なる「サハリン風チャブチェ」になった。

作り、完成後は全員でお互いの料理を味見し、後片付けをして授業終了である。料理は各自持参した容器に入れて持ち帰る。

5. まとめ

教育院では、サハリン韓人だけでなく、すべてのサハリン市民に門戸を開けて言語・文化教育を行っている。現在のサハリンにおける韓国語・文化教育は、「民族教育」ではなく「生涯教育」「市民教育」の性格が強い。サハリンには日本や中国にあるような民族学校がなく、今後作ろうという動きもない。その理由は以下の通りである。①民族教育が禁止されていた時代があり、生活言語としての韓国語がほぼ失われてしまった。②韓国とソ連に国交がなく、経済的支援を受けるのが困難で民族学校が作れなかった。③韓国とロシアの国交が結ばれてすぐ教育院が設立され、ある程度韓国語が学べる環境が整備された。

また、現在の言語・文化教育の特徴として、サハリン韓人以外の学習者の比率が増加していることがあげられる。韓国語を学ぶサハリン韓人の動機も多様化しており、韓国語以外の外国語を学ぶサハリン韓人もいる。このことはサハリンの地理的条件が関係していると思われ、サハリン韓人と言語学習については今後より深い調査を行う予定である。

文化教育は「料理」や「音楽」等の分かりやすいコンテンツが強調される一方で、伝統的な生活習慣や風習は失われつつある。また、「韓国文化」として広められているものが、実際は本国とは異なる性質を持ち合わせている場合があり、「韓国文化」としての普及に問題があるように思われる。しかし、それらを否定するのではなく、「サハリン韓国文化」という独自のものとして発展させていくという方向性をとることもできると考える。

参考文献、web サイト

(日本語)

朝倉敏夫 (2015) 『コリアン社会の変貌と越境』 臨川書店

アナトーリー・T・クージン (1998) 『沿海州・サハリン近い昔の話：翻弄された朝鮮人の歴史』 岡奈津子・田中水絵 訳、凱風社

池田貴夫 (2005) 「近代の民族移動とその後の移住民・先住民の地域文化活動：カナダ・アルバータ州、ロシア・サハリン州での調査から」 『18世紀以降の北海道とサハリン州・黒竜江省・アルバータ州における諸民族と文化：北方文化共同研究事業報告』 261-298

金珍娥 (2019) 「韓国語教科書の問題と目指すべき方向—韓国語研究から韓国語教育へ—」 『明治学院大学教養教育センター紀要：カルチュラル』 13：45-62

(韓国語)

안상경・이병조 (2013) 「러시아 사할린 한인 공동체의 한민족 민속문화 전승 연구: 유즈노사할린스크 한인 공동체의 민속문화를 중심으로」 『在外韓人研究』 0: 133-169

임엘비라 (2006) 「사할린 한인들의 민족교육현황」 『전남대학교 세계현상문화연구단 국제학술회의』 12: 28-33

조현용・이상혁 (2012) 「러시아 사할린 지역의 언어 환경과 한국어교육 문제 연구」 『한국어 교육』 23: 257-282

사할린 한국교육원 (サハリン韓国教育院) <http://www.sakhalinedu.com/main/main.php>
(最終閲覧 2021 年 2 月 27 日)

(わたなべ かおり・千葉大学人文公共学府博士後期課程)